歴史地震
第37号 (2022) 123頁

[講演要旨]

岩手出身の先人による災害への対応について

―後藤新平・山奈宗真を中心に―

花巻市博物館* 小田桐(白石) 睦弥 小田島 智恵 松橋 香澄

§1. はじめに

本発表では，現在の岩手県域出身の先人がどのように災害に対応していったのか，また，地元とのかかわりなどについて検討する．いわずと知れた後藤新平と山奈宗真であるが，この2人のほかに，岩手出身ではないが花巻と縁の深い佐藤隆房の活動も紹介したい．

§2. 後藤新平について

後藤新平は，安政四年(1857)，仙台藩の出城である水沢城の城下に，仙台藩一門留守家の家臣，後藤実崇の長男として生まれた．留守家は伊達家よりも格式が高く，仙台藩の中でも一目置かれる存在であった．しかし，幕末，奥羽越列藩同盟に加担した彼らの土地には戊辰戦争に勝利した諸藩の人々が赴任してきた．この際，旧熊本藩の安場保和が大参事として赴任し，この人物に気に入られたことで，後藤新平は東京へ行くことになり，また，医学の道に足を踏み入れることになる．新平は列藩同盟各藩に暗い影の落とされた明治初期に，光を見出した人物のひとりであったといえる．

明治二十八年(1895)，38 歳の新平は日清検疫で行政の舞台へ出ていくこととなる．コロナ禍の昨今注目されている業績の一つである．この頃から，児玉源太郎の腹心的存在となっていった．

そして，新平の重要な業績のひとつに，大正十二年(1923)9 月 1 日の大正関東地震(関東大震災)の復興事業が挙げられる．同年 4 月に東京市長を辞していた新平は，内務大臣に就任し，震災後の応急措置とその後の復興計画に辣腕を振るうこととなった．新平は，震災復興計画の方法について，パリ改造を参考に，土地を地権者から大きく収用する手法の採用を試みた．水沢時代に，父祖の土地が新政府に収用されるのを目の当たりにした新平の視点であったのではないかとも推察される．

優れた人材を適材適所に配置し臨時官庁・帝都復興院を組織するなど復興計画の始動期を強力にリードしたが，予算の削減なども行われ，虎ノ門事件によって内閣自体が倒れ，復興の表舞台からは姿を消した．

§3. 山奈宗真について

山奈宗真は，盛岡藩の子弟として，弘化四年(1847)陸奥国横田村に生まれた．幼い頃から武士としての素養に加え，剣道・砲術・和算・地理・測量・開墾・植林を学び，維新後は，牛馬の育成や養蚕を研究し，製糸場・私設農業試験所の開設や，当時全国唯一の私立図書館とされた信成書籍館の設置にも尽力した．盛岡藩の士族が生計を成り立たせることが困難だった時代に，殖産家・勧業家として成功した人物であったと言える．

明治二十九年(1896)6 月 15 日，明治三陸地震津波が発生，三陸沿岸を中心に死者約 2 万 2 千人、流出、全半壊家屋 1 万戸以上という被害をもたらした．災害発生から約1か月後，宗真は三陸沿岸の被災地に入り，被災の状況を詳細に調査した．宗真が自ら巡回に出ることを決意したのは，この調査が水産業の浮沈，さらには沿岸と中央部を結んでの産業経済振興に関わる一大事と認識したためであった．

§4. 佐藤隆房について

佐藤隆房は，明治二十三年(1890 年)に栃木県那須村湯本の温泉旅館の長男として生まれた．家業ではなく医学を志し，縁あって花巻における近代病院の礎となる花巻共立病院を創立したことで知られる．

昭和八年(1933)の昭和三陸地震津波の際には，病院の職員を伴い，被災地に駆けつけた．その後も，昭和二十年(1945)8 月 10 日の花巻空襲の際に，被弾した人々の手当てや手術を行った．これは，昭和八年の際の経験が生かされたものと考えられる．

* 〒025-0014 岩手県花巻市高松 26-8-1
電子メール: museum！city.hanamaki.iwate.jp